

絶対に助けてくれる…。外に出て人と関わる

―通所しはじめた時の気持ち
ちは？

通所する前、大人は怒鳴（どな）る人というイメージが強かったので、通所に対して引け目を感じていました。

でも通ってみるとイメージと全然違う。怒らない大人っているんだ、と思いました。利用者さんに対してでも不安を感じていました。偏見があったのかもしれない。私も入院していた時があったのですが、症状のひどい人を見てきたので、こわさがあつたんです。強い言い方をしてきたり、いろいろ押しつけて

きたりする人がいるのかな、って。でも、そんなこと全然ありませんでした。―訓練を通じて成長したなと思うことは？

人と関わるのが苦手だったんです。話に割り込まれたりすると、「えっ！」ってイラついてしまう。でも、いろいろな人と関わることで少しだけですけど許容範囲（きょうようはんい）が広がった気がします。職員さんとの面談を通じて、客観的に状況を見ることを意識するようになったんです。

あと、辞めたくて休んでいたことがあったんです。でも、楽しかったことばかり思い出しちゃう。「戻りたい」。連絡するのは勇気がいりました。でも、信頼していたので連絡できたんだと思います。絶対、助けてくれるって。あのとき辞めなくて、本当によかったです。

―就職活動をいつ頃意識するようになりましたか？

入所後1年くらいですかね。周りの人に恩返ししたかったのと、就職していく利用者さんが生き生き（いきいき）していて、私もそうなりたいなと思いました。

―疲れた時や息抜きしたい時のストレス解消法は？

人と話すことです。職員さんと仲のいい利用者さんと話すことで、気分が楽になります。興味や関心がありません。話題でも、話しているだけで楽しいんです。

―就職や今の生活に悩んでいる人に伝えたいことは？

外に出て人と関わることです。ね。私の場合、チャレジョブに来て生活リズムが整ったし、あたたかい支援をしてくれる職員さんとも出会えました。こんな大人と関われるって滅多（めった）にないと思います。



※外に出たことで、イメージとは違う世界が見えてきた

名言との対話

その悩み あの人だったら、どう語るか

グループでの雑談にうまくはじめません

―グループでの雑談にうまくはじめません。何か気にさわることを言ってしまうのではないかと不安になってしまします。といって、黙っているままでは関心がないと思われるんじゃないかと心配です。どうすればいいのでしょうか？

いないんじゃないかな。話すのが得意ではなかったという文筆家は次のように言っています。

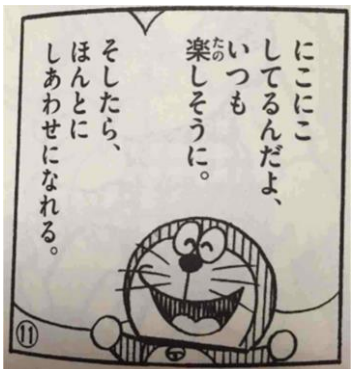
文筆家―本質的なことを考えている人は、必然的に、無駄口をきかなくなります。だいたい口数が少なくなるんですよ。だって本当に大事なことが、ペラペラ言葉になるはずがないでしょう。

旅人A…もしかししたら私、無理して話そうとしているのかも。

旅人B…空気を読めずに変なことを言ってしまうタイプなら、はじめにカミングアウトしてしまう手もありますね。「空気が読めなくて、変なこと言っちゃったらごめんなさい」とか。また、話を聴く側に徹（てつ）するというのがいいかも。先の文筆家は続けて、こう言っていました。

文筆家―あの人にはああいう人なんだ、無駄口をきかない人なんだと、思わせてしまいが勝ちです。そうして、本質的なことだけを、時々チャットと口にする。

旅人B…話というのは、楽しく聴いてくれる人がいてこそ続くものですよ。そういうえば、ドラえもんもこう言ってます。ドラえもん…にこにこしてるんだよ、いつも楽しそうに。そしたら、ほんとにしあわせになれる。



※小学館「藤子・F・不二雄 大全集」ドラえもん第3巻より

推しコメ



羽生市のオレンジ

ベル。数種類のパスタやスイーツ、グラタン、軽食などのメニューがあります。

内装と外装は絵本のような雰囲気、平日に行われる同絵画教室の生徒さんによる絵が飾られています。また、雑貨やアクセサリーなども売られています。おすすめはポロネーゼやエビとプロッコリーのトマトクリームパスタです。（賀藤祥子）

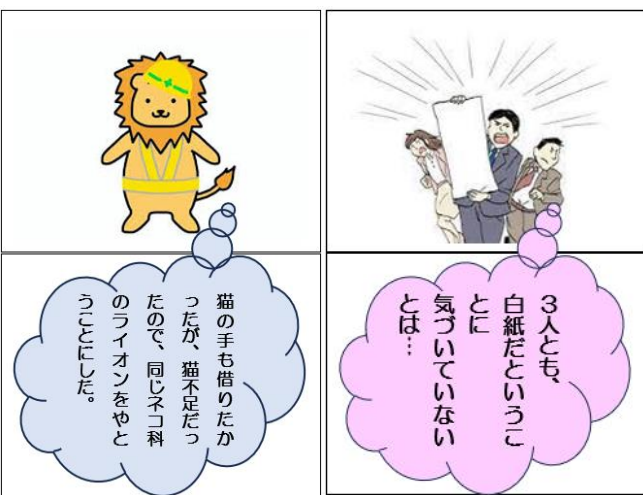
所在地…羽生市上岩瀬1553・1
営業日…土日月曜日



【気まぐれ欄】今月の『クスッと』マンガ

※お笑い好きメンバーによるツッコミです！

【コメント作者：はりべじ】



【気まぐれ欄】今月のおすすめ本【Book Review】

※読書好きメンバーによるおすすめ本の「書評」です



『クスノキの番人』
著者：東野 圭吾
出版社：実業之日本社
発行日：2020年3月17日

【評者：木瀬】

その木は不思議な力を宿（やど）す。クスノキを通じて祈念者（きねんしゃ：いのる人）の思いを後世（こうせい）につなぐ。推理でもありファンタジーでもある小説だ。窃盗（せつとう）で逮捕（たいほ）され、途方（とほう）に暮れていた主人公の玲斗（れいと）。ある日、伯母（おば）を名乗る千舟（ちふね）の手助けで保釈（ほしゃく）されることに。しかし、千舟からあることを命じられる。それは「クスノキの番人」になること。クスノキの能力に魅了（みりょう）されていく人々は、ある「使命」をもってクスノキに祈念する。クスノキに関わる人を通じて、それまでと違った景色を見つめることになる玲斗。言葉の神秘的（しんぴてき）な美しさも感じるができる一冊だ。

「コラム」自問自答

（筆者…みなと）

三月号ということで卒業をテーマに書きたいところだが、残念ながら特筆（とくひつ）すべき卒業の思い出がない。高校も卒業していないので、一番記憶にある卒業はゲームだろうか▼先日発売された「ペルソナ3リロード」は、主人公が一年間の高校生活を通してシャドウと呼ばれる謎（なぞ）のモンスターと戦うストーリーだ。強くなるには友達や先輩（せんぱい）、後輩（こうはい）、街の人々と出会い、絆（きずな）を深めることも重要になっていく。正直、ひねくれた私には「人との出会いで人は変わるんだ」という青春ストーリーを素直に受け止められない。とはいえ、才能あふれる頼れるイケメンになり理想の高校生活を疑似体験（ぎじたいけん）（ぎじたいけん）できるのは素直に気分がいい▼しかし、そんな物語は単純なハッピーエンドではなく、ピターなラストを迎えた。主人公の最後を見届け、少しは私も人との出会いの大切さに気づけた気がする。ひねくれた私からの卒業だ…なんてベタなオチを書きたくない私は、まだ厨二病（ちゅうにびょう）（ちゅうにびょう）を卒業できない。

「コラム」自問自答

（筆者…木瀬）

「夜の校舎窓ガラス壊して回った」。尾崎豊の「卒業」の歌詞（かし）が頭にちらついた。尾崎豊までとはいかないが、私は周りの大人たちのおかげでひねくれた道が修正され、そこそこ行儀（ぎようぎ）よくまじめに出来てきたと思う▼大人は真っ黒で悪いやつばかり。皮肉にも、大人からそう教わった。以前の職場で過酷（かこく）な労働を強（し）いられたこともあり、ひねくれて偏（かたよ）った思考を持つようになっていた▼「この世は怒る人ばかりじゃないよ」。就労移行支援に入所したての頃、職員が私を安心させてくれた。私の悪（あく）しき考えを卒業させてくれたのもまた、大人だった。人間は延々（えんえん）と卒業を重ねていくものなのかもしれない。自分自身を卒業することによって新たなステージが見えてくる気がする▼いつか自分自身を卒業して尾崎豊みたいにファンキーで、「卒業」の歌詞のとおり「本当の自分にたどりつける」人間になりたい。盗んだバイクで走り出す度胸（どきょう）はさすがにないが。